

「十二人の怒れる男（3人）」

原作…レジナルド・ローズ

上演台本…永妻晃

【1】

ドアが閉まり、鍵を掛ける音。

C・I

2 「あッ……あいつ鍵閉めたぜ」

1 「当然でしょう」

2 「へえ、隔離状態か？ こんなはつきりした事件を弁護士の奴長話しやがって」

1 「皆さん、はじめます。メモをくばります」

2 「何すんだよ？」

1 「無記名投票用紙ですが」

2 「そんなのまじろっこしいよ、挙手！」

1 「皆さんは？」

3 「わたしもそれで……」

2 「早く決めようぜ、みんな忙しい身体なんだ」

1 「この事件は……」

2 「第一級殺人で有罪の評決を出れば奴は死刑だ」

1 「あなた、黙って！」

2 「了解！」

1 「えー、有罪、無罪どちらの評決でも全員一致が条件です」

2 「有罪！」

と手を上げる。

1、2を無視して、

「……では、有罪の人は……」

3以外、挙手。

一同、3を見る。

1 「有罪が十一人……無罪は？」

3、手を挙げる。

2 「(3)に おいー」

1 「無罪、一人。本当に無罪だと思うんですか？」

3 「解りません」

2 「何だ、この野郎！」

1 「法廷で聞いたでしょ。あの子は人を殺した」

- 2 「お前、寝てたのか？」
- 1 「父親の胸を10センチも刺したんですよ」
- 2 「証拠は山ほどあるんだ！」
- 1 「どうしたいんですか？」
- 3 「話し合いましょう」
- 2 『話し合おう』？』
- 3 「ええ」
- 2 「あきれね、今さら……」
- 3 「私が有罪に投票するとあの子は死刑だ」
- 2 「(大声で) 死刑の何処が悪い!!」
- 1 「あなた、もつと冷静に、落ちついて下さい」
- 3 「人の生死を五分で決めて、評決が間違っていたらどうするんです？」
- 2 「どこが!!」
- 1、2を睨む。
- 2 「(感情を押さえて) どこが、間違いだ どこが」
- 1 「(2に) そうです」
- 3 「二時間話し合いましょう」
- 1 「一時間？」
- 2 「何だ？」
- 3、柱時計を差して
- 「現在、5時15分ですから、6時15まで、でないと私は無罪を押し通します」
- 2 「みんな聞いたか、どういう奴だこいつは!？」
- 1 「私はね、彼の証言から有罪を確信しています。つまりあの子の言葉の中に無罪の証明が一切ない」
- 3 「有罪こそ証明が必要でしょう」
- 2 「理屈こねやがって!」
- 1 「みなさんご意見は? (居るであろう人に) あなたは、あなたは……分かりました」
- 2 「よし分った。一時間だ……話し合おう!」

1 「……それで？」  
2 「言ってみろ！」

3 「被告の少年は悲惨な人生を送って来ています。スラム街に生まれ、九歳で母と死別、父親は文書偽造で服役」

2 「そんな話は法廷で何べんも聞いたよ」

3 「その間、彼は福祉施設に預けられていて、彼は不幸な幼年期を過ごしています」

2 「おい、今度俺の不幸話もたっぷり聞いてもらおうか、機会があったらな」

3 「少しは彼の事を考えてやっても」

2 「ちよつと待つてよ。人殺しに何を考えてやれつて言うんだ?！」

1 「あなたさ、何故彼が無実なのか言つて貰えますか？ 目撃者がいる。下の階の老人が……」

2 「そうだ、いいか、下の階に住んでいる老人が夜中の十二時十分に争うような音を聞いている」

1 「そしてあの子が『殺してやる』と叫んだ直後に人が倒れる音がした」

2 「警察が駆けつけると父親が死んでい」

1 「まだ十八歳なのは同情するけど罪は償わないとね。向かいのビルの女性の証言が何よりの証拠だと思いますよ。彼女は少年が人を刺すところを見ている」

2 「見てるんだよ！」

## 【12】

3 「しかし彼女の部屋は高架鉄道を挟んだ向かいのビルです。その時電車も通過していた」

1 「車掌の証言では、『車両には乗客は一人も乗っていないかった。彼女の部屋から電車の向う……』つまり、被告の少年の部屋が見えると証明しています」

2 「少年の隣人たちの証言では、少年と父親は喧嘩していた。大声で罵り合っていたと。夜の八時頃、オヤジと倅が大喧嘩して、頭にきたオヤジがガキを二回ぶん殴つて、少年は怒つて出て行った……」

1 「そう、それが事件の発端ですよ」

2 「人は動機もなく人を殺さない、解るか！」

3 「しかし、少年は小さい頃から何度も殴られていて暴力は生活の一部です。たった一回殴られたぐらいで殺しますか？」

1 「限度だったかもしれませんが。限度……分かりますね」

2 「奴が犯人に決まってるだろ。前科を見なよ。ひったくりとナイフの乱闘で施設送りだ。ナイフは名人だそうだ」

3 「本気で言ったんでしょか？」

2 「何を？」

3 「ですから、本気で父親に『殺してやる』と言ったんでしょか？」

2 「ああ、本気だよ、だから殺した！」

1 『『家庭環境』のせいで事件を犯したとしても犯罪は犯罪です。スラム街は犯罪の巣です』

2 「スラム街の奴らはクズだよ、社会に必要なはない！」

3 「私もスラムの出身です」

2 「ほー、なるほどな?！」

3 「だからといって彼の味方をする訳でもありません。私はただ、正しい評決を出したいだけです」

2 「おい、寝ぼけたことを言うなよ。立派な裁判をやったろうが、金も掛ってるんだ！」

3 「私は法廷の六日間の証言を皆さんと一緒に聞いて来ました。しかしその証言の中に確かな証拠はないと思います始めたんです」

2 「おい！」

3 「弁護人も十分に反対尋問をしていません。すべてに見逃しが多過ぎます」

1 「質問なんかしたら、余計不利になるからじゃないんですか？」

3 「私なら弁護人を替えます。命がかかっているんだから。検察側の証人を叩きのめして欲しい！ 犯行を見た証人は女性一人だけで、もう一人の老人は声を聞いたとか、人が

倒れる音がしたとか、状況証拠だけです。もし、間違っていたら？」

2 「間違える？」

3 「人間は間違えを犯すものだ」

2 「間違っでない！」

3 「絶対に？」

2 「絶対なんてあるわけないだろうか!!」

3 「(にっこり) そのとおりです」

2 「肝心な話をしよう。いいか、父親の胸に刺さっていたナイフは少年が犯行の夜に買ったと認めている……あんたが納得するように、順に考えてみようぜ……父親に何度か殴

られて

3 「二回」

2 「そうだ、二回だ、一回殴られて……午後八時に少年は家を出た。そのまま中古店へ行きナイフを買った。柄に珍しい模様があるナイフだ。店の主人も『あんなナイフは初めてだ』と言っている。少年は午後十一時半に映画を観て午前二時十分に帰宅し逮捕された。『ナイフは映画へ行く途中で落としたと言っている』……嘘だな！」

1 「そう、映画館へも行かなかったと思いますね。出演俳優も、題名も覚えていないんだから」

2 「本当はナイフを買った後、家に戻って、父親を刺し殺し、午前十一時十分に家を出た」

1 「本当にあの子がナイフを落としたと(3)に あんたは信じてるの？」

2 「たまたまそのナイフを拾った人間が少年の家で父親を刺したとでも言うのか？」

3 「誰かが似たナイフで刺したとか……」

2 「まさか……突わせるなよ？ そんな偶然がある訳ないだろうが！」

3 「可能性はあります」

2 「奇跡でも起きない限りない！」

3 「そうですかね」

1 「同じナイフがあるっていうの？」

2 「馬鹿言うな！」

3、同じ絵柄のナイフを取り出し、一同に見せる。

一同、騒然。

1 「同じだ？」

1、 2、 3に近づき、ナイフを確かめる。

1 「これ、どこで？」

3 「昨夜、少年の家の近くの質屋で買ったんです。二十ドルでした」

1 「同じ様なナイフで誰かが父親を刺した？」

2 「無い、そんなことはない」

3 「さあ、どうでしょう。現にこうやって同じナイフが目の前にあるじゃないですか」

1 「確率は低いけど、可能性はある」

2 「こうなったら評決不能にしようぜ、疲れた。必ず再審で有罪になるさ」  
「おい、あんたの言った約束の時間だ。さあ、お開きだ！」

1 「ちょっと、待って下さい。ナイフの件は？」

2 「一晩中ここに居る気かよ」

1 「人の命がかかっているんですよ」

2 「おい、今何て言った？」

1 「人の……」

2 「命か？」

1 「はい」

2 「ナイフなんかどうでもいいだろ。実際に犯人を見た女の証人がいるんだ！」

1 「……そ、そうでしたね」

2 「いいか、目撃者が居るんだよ……どうする！」

3 「……提案があります」

1 「何ですか？」

3 「もう一度投票しませんか？ 私をのぞいて。無記名にしましょう。もし有罪が11なら皆さんに従います」

2 「確かだな？」

3 「もちろん」

1 「よし、そうしましょう。反対の人はいませんね……では、用紙を配ります。

1、用紙を配りだす。

F・O

【L3】

1、投票用紙を読んでいる。

F・I

1 「有罪、有罪、有罪、有罪、有罪、有罪、有罪、有罪、有罪……無罪」

2 「誰だ?！」

1 「無記名投票に同意したでしょ」

2 「(1)(1) おろ」

1 「何ですか？」

2 「お前だろッ。もともとの不良が環境のせいで犯罪者になったなんて、お涙ちょうだいのお伽噺に乗りやがって！」

- 1 「なぜ私だと思っんです?」
- 2 「俺は勘がいいんだよ」
- 1 「……」
- 2 「……だろうが!」
- 1 「はいッ……皆さん……(おびえながら、ゆつくりと手を挙げ) 私です。私が無罪に一票入れました……理由を聞きたくありませんか? (居るであろう人に) でしょう。居るであろう人に) でしょう。いいですか……彼(女)は一人で闘った。ひとりで……有罪に確信が持てないからって、なかなか出来ることじゃない……私には到底とっぴできません。その勇気を尊重して、私は無罪に入れたんです。有罪かもしれない……。しかし、しかし……しかし、もっと話し合うべきでしょ。10対2……」
- 2 「よし、分った……(1に) 階下の老人の証言では、少年の『殺してやる!』と言う声を聞いた後、人が倒れる音がした。不審に思って玄関のドアを開けると階段を逃げて行く奴の姿が見えた。これはどうなんだ?」
- 3 「老人が見たのは本当に少年だったんでしょうか? それに天井越しに声が聞こえますか?」
- 2 「爺さんは確かに聞いたんだよ! 暑い夜だ、窓が開いてたんだよ!」
- 3 「しかし、その叫び声が少年の声だったかどうか聞き分けるのは難しいんじゃないんですか?」
- 2 「こいつ、変だぜ、話になんねえや? 向かいのビルの女性の証言がある。車両の窓越しに少年が父親を刺すのを見た。それで十分だろう」
- 3 「いいえ」
- 1 「何か確信があるなら言っして下さい」
- 3 「高架鉄道がある一点を通り過ぎる時間は? 一点と言うのは殺人が起きた部屋の事です」
- 1 「何か関係があるんですか?」
- 3 「何秒だと思っいます、電車が通過する時間です?」
- 1 「さあ……何秒だろう?」
- 3 「居るであろう人に) 分ります? (居るであろう人に) 分かります?……そう、約8秒です。電車が一点を通過する時間……」
- 2 「今度は、何のゲームだ?」
- 3 「いいですか、6両の電車が、ある一点を通過するのに約8秒弱……線路際に住んだ経験のある方はいます?」

1、手を上げ、

- 「以前、高架鉄道を見下ろす部屋に住んでいたけど……」
- 3 「電車が通過する時に他の音は聞こえませんでしたか？」
- 1 「何も聞こえないですよ。電車の音がうるさくて……」
- 3 「いいですか、二つの証言を結び付けます。まず、階下に住んでいる老人が『殺してやる』という叫び声を聞いた直後、人が倒れる音を聞いている」
- 1 「ええ」
- 3 「第二に、向かいビルの女性が窓の外を見ていて、最後の二両目越しに殺人を目撃した」
- 1 「それが……」
- 3 「最後の二両越しに殺人を見たなら、父親が倒れた時、電車はちょうど通過中だった」
- 1 「確かに……」
- 3 「老人は少年の『殺してやる、と言う叫び声の直後に人の倒れる音を聞いた』と証言しています……」
- 1 「はい……」
- 3 「電車の通過中なら……いいですか」
- 1 「電車が通過中なら？」
- 3 「老人が、少年の『殺してやる！』と叫んだ声も、人が倒れる音も、凄まじい電車の轟音で、聞く事は不可能です……」
- 1 「そうだ……」
- 3 「つまり、老人は……」
- 1 「何も聞こえなかった」
- 3 「そうです」
- 2 「大声で叫んだんだよ、大声で!!」
- 1 「無理ですよ。テレビのボリュームをいっぱい上げたって聞こえないんだから」
- 2 「いいか、何べんも言うが!!」
- 1 「落ちついて!」
- 2 「うるせえ! 爺さんはな、確かにガキの声を聞いたんだよ、だからドアまで走って行って奴を見たんだ」
- 1 「待って!」
- 2 「何だ!」
- 1 「“ 爺さんが走った ” ？」
- 3 「どうしたんですか?」
- 1 「みなさん!」
- 2 「何だよ?」
- 1 「もし……もし、あの老人が嘘をついていたとしたら……」
- 2 「何だ!？」
- 1 「老人の足取りを覚えていませんか? 老人はゆ・つ・く・り・と証言台へあがった。そう、左足が不自由なのを隠そうとしてね」

- 2 「足が何だあって？」
- 1 「左足をね、少し引き摺っていたんですよ。気が付かなかったですか？」
- 3 「悪い浮かべ、確かに」
- 1 「老人は身体が不自由な事を恥ずかしいと思っていたんじゃないでしょうか？」
- 3 「待って下さいよ」と、考える
- 2 「今度は何だ！」
- 3 「やりましょう」
- 1 「何をです？」
- 3 「……試すんです」
- 1 「試す？」
- 3 「ええ、脳卒中で足の不自由な老人が、15秒でベッドから玄関まで行けるか？」
- 2 「20秒だろうが」
- 1 「いや、15秒と自慢げに言っていました！」
- 2 「もうろくしている爺さんだ、信用できるか！」
- 1 同、2を見る。
- 【L4】
- 2、バツの悪い顔。
- 3、ポケットから手帖を出し、
- 1 「いいですか、ベッドから寢室のドアまで3.6メートル、廊下から玄関のドアまで13メートル、合計16.6メートル。これを15秒で歩けるか？」
- 2 「歩けるだろ」
- 3 「老人にしては長い距離です。ここがベッドの位置。(3歩いて)ここが寢室のドア。廊下を測ります」
- 2 「何をやるつもりだ？」
- 3 「時間を計ります……玄関の位置はここ。チェーンがかかっていた。秒針付きの時計を持っている方は？」
- 1 「私が……」
- 3、ベッドの位置に着き、
- 3 「ではいつでもいいですから、合図をして下さい」
- 1、時計を見つめている。
- 2 「何を待ってんだよ」
- 1 「時計の針が上に来るまで……」
- 2 「(采れる)」

- 1 「どうぞ！」
- 3 「ベッドから起き上がる」
- 3、ベッドから老人が起き上がる動作をして、左足を引きずり歩き出す。
- 1 「5秒経過」
- 2 「もつと速く歩いてたぞ」
- 3 「了解！」
- 3、少しスピードをあげる。
- 1 「10秒経過」
  - 1は15秒を過ぎてしまったのでそこで立ち止まる。
  - 3、ドアの位置まで来て止まり、
- 「ドアチェーンを外す、ドアを開ける、ストップ。時間は？」
- 1 「31秒です」
- 2 「……!？」
- 1 「あの老人が嘘を突いた!? いや、事件を知って、少年の声を聞き、人が倒れる音を聞いたと、思い込んだ……」
- 3 「居るであろう人を見て あなた……無罪、分かりました。あなたも……」
- 2 「(居るであろう人を見て) なにー!？」
- 1 「8対4になりました。確かに法廷の証言では少年は有罪に思えたけど、よくよく考えりゃ、逮捕されるのに家に帰って来たのかもおかしい」
- 2 「刺したナイフを取りに帰ったんだよ」
- 1 「なぜ、現場にナイフを残したんです？」
- 2 「父親を殺してパニック状態で逃げ出したんだよ」
- 1 「そんなに慌ててましたか、指紋をふき取る冷静さはあったんですよ」
- 3 「そこが不思議なんです。もし、少年が犯人なら、何故ナイフを死体に残し、指紋をふき取ったんでしょうか？」
- 1 「ナイフを買った事は、店の主人が知っていますからね。少年の父親に恨みを持った誰かが……ほら、『文書偽造で服役していた』ってありましたよね。その被害者の誰かが、偶然同じようなナイフで少年の父親を殺し指紋を拭き取った、どうですか？ これなら理屈に合う。それとも、恨みではなく強盗としたら？」
- 2 「金があるような家じゃないぜ」
- 1 「お金以外の値打ちがあるもの？」
- 2 「そんなものがあつたらとっくに金に換えてるだろう」

- 1 「さてよ？ 『ナイフ以外指紋を拭き取った形跡は部屋の何処にもなかった』と鑑識官もいつてましたよね……だとすると強盗じゃない。手袋をしていたら？ はじめから父親を殺す気なら手袋を用意していた筈ですね……ところがナイフの指紋を拭き取っている。つまり手袋はしていなかった事になる……これは計画的ではなく衝動的だったという事ですね」
- 2 「……終わりか？」
- 1 「はい……」
- 2 「衝動的だったとしても、犯人ならナイフの指紋を拭き取るなんてしないさ、持ち帰れば済む事だ」
- 3 「父親は心臓を刺されています。ナイフを抜くと返り血を浴びます」
- 1 「そうですよ」
- 3 「犯人はその事を知っていた。血だらけの服装で街を歩けません」
- 2 「それは、少年にも言える事だ！」
- 3 「ナイフの名人の少年が犯人なら、ナイフを抜き取っていました」
- 2 「どういうことだ？」
- 3 「ナイフを抜く時、布を傷口に当てれば返り血は浴びません」
- 2 「ほう、さすがスラム出身だな」
- 3 「……少年はパニック状態だった。咄嗟にナイフの指紋を拭き取り、その場を立ち去った。そして、三時間後に気持ちが悪くなり、ナイフを取りに戻った」
- 2 「その通り！」
- 3 「でもそうじゃなかったら」
- 2 「馬鹿を言え！ 随分ホラ話は聞いた事はあるが、こんな茶番劇ははじめてだ。みんな正義に燃えてこの部屋に入ったのに……どうしたんだ！ あのガキは死刑にすべきなんだよ。電気椅子送りだ！」
- 1 「ちよつと待って、あなたは死刑執行人か？」
- 2 「ああ、スイッチは俺が入れてやるよ！」
- 1 「少年を殺したいだけなんでしょう」
- 2 「殺してやるよ!!」
- 3 「あなたは異常者だ、狂ってる！」
- 2 「殺すぞ!!」

一同、2を見る。

3 「(微笑) まさか、本気じゃないでしょ？」

2、3を睨みつける。

1 「みなさん！ みなさんは争うためにここに来た訳ではない筈です……私情を交えてはいけないと思います……どうです、また投票しませんか？ 反対の方は……」

一同、異存がないようである。

1 「(領き)では私から……無罪。(居るであろう人に)あなたは？ 有罪。……あなたは？

……無罪。……あなたは？……無罪。……あなたは？ あなたは？ (2に)あなた

は？」

2 「有罪！」

1 「(居るであろう人に)あなたは？ ……分かりました、6対6です」

【5】

2 「……(無罪拳手の相手に)はッ、お前たちこそ狂ってるよ！」

1 「(3に)ひとつ疑問なのは、犯行時間に観ていたはずの映画を少年が思い出せなかったことですよ」

3 「彼の立場として、思い出せますかね。父親と大喧嘩をして家を飛び出し、帰って来るとアパートの前には数台のパトカーと大勢の警察官。しかも警察の尋問は父親の死体のある寝室でおこなわれたんです。彼の精神は尋常ではなかった筈です。法廷では映画の内容を言っていましたよ」

2 「弁護士の入れ知恵だよ、俺は犯行直後の尋問を信じるね」

3 「……」

1 「もう一つ、気になったんですが……ナイフの刺し傷は下に向かって付いていたんですよね……父親は185センチの大男で、少年は167センチで、父親肩ぐらいの身長です……それだけの身長差のある人を上から刺せますか？」

2 「ふん！ 何も知らねえ奴だな。テレビドラマでもやってるだろうが、(ナイフを受け取り)いいか、ナイフはこう握るんだ。(逆手に握る)そして、こっくだー！」

2、突き刺す仕種をする。

2 「背の差なんて関係ねえ、下向きになってるだろう、納得したか」

3 「納得しませんね」

2、3を睨む。

3、2からナイフを受け取ると、

「ナイフはこうは構えない」

3、2がやった逆手から包丁を握るように持ち替え一同に見せる。

3 「こう握ったものを、こうすると、(逆手にする) 時間がかり過ぎる……(持ち替え) っ(こう持ったら、このまま……スウッ!」

3、ナイフの突きあげる。

3 「少年はナイフの名人でしたよね」

1 「なるほど」

3 「……投票しませんか？」

1 「……分かりました」

1、一同を見渡し、

1 「無罪の人……1、2、3、3、5、6、7、8」

1、も手を挙げて、

1 「9……有罪の人は……(いるであろう人に) 1、2」

2、手をあげない。

一同の視線が2に集まる。

1、改めて2に……、

「……有罪の人は？」

2、手を挙げる。

3 「みなさん……偏見抜きで物事を考える事は難しいです。偏見で真実がぼやけてしまう。

しかし、九人が被告を無罪と思っている。間違っているかもしれない。犯罪者を釈放しようとしているのかもしれない。三人の方にお聞きしたい。なぜ有罪だと確信を持っているんですか？ (2に) あなた、何故 確信を……」

2 「いいか、女が見てるんだよ、女が……それが証拠だ！」

2、3に怒りの眼を向けるが、顔を反らし、メガネを外すと目の付け根辺りをさすり出す。

1 「……ちよつと……そつだ?!」

3 「どうしましたっ？」

1 「(2に) ちよつとあなたにお聞きしたいんですが」

2 「何だ？」

1 「……何故そんな風に鼻をこするんですか？」

- 2 「気になるからだ」
- 1 「メガネのせいですか？」
- 2 「そうだよ、もういいか」
- 1 「みなさん、思い出して下さい。目撃者の女性ですが……あの方も法廷で何度も鼻をこすっていましたね」
- 3 「確かに……それが？」
- 1 「彼女は60幾つとか言っていましたね」
- 3 「5です、65歳」
- 1 「公おおやの場に出るので若作りをしていた。厚化粧で髪も染め、服装も若い女性が着るような物だった。メガネを掛けるのが恥ずかしかったんでしょね……」
- 2 「鼻をこすっていたからってメガネとは限らんだろうが」
- 1 「いや、あれはメガネの跡ですよ」
- 3 「メガネ以外にそんな跡が付きます？」
- 2 「分かったメガネの跡でしょう。しかし殺しを見たときは一人で家に居たんだ。若ぶる必要なんかないだろう」
- 3 「確かに……しかし寝ようとしている時ですよ？」
- 1 「メガネをかけて寝る人はいないでしょう」
- 2 「さあ、どうかな？」
- 3 「もちろん外してた」
- 2 「何故分かる！」
- 3 「すいそく推測です……彼女は『何気なく外を見た』。メガネは外していただでしょう」
- 2 「だからッ」
- 3 「ま、聞いて下さい。外を見たとき、殺人が起きた。メガネを掛ける余裕はない。彼女が見たという少年はぼやけて見えてた筈です」
- 2 「おい、自信ありげだな。お前女の部屋にいたのか……遠視だったら、サングラスの跡かもしれないだが」
- 1 「たとえ、遠視だとしても、夜間に18メートルも離れている人間を確認できるなんてそんな人間がいますか？」
- 3 「居るであろう有罪の人物にどうです、これでも少年は有罪ですか？ ……分かりました」
- 1 「……これで無罪は十一です」

3 「(2)に) 有罪は……あなた一人だ」

2 「構わねえよ、これは俺の権利だ！ お前ら文句あるのか！ いいか法廷での証言の何もかもが証拠だ！ 奴は有罪に決まっているだろ。爺さんがみんな聞いたんだ、ドアまで走って行って奴を見たんだ！ 秒数なんて関係ねえ！ 同じナイフがあったからどうした！ お前たちの話はみんな大嘘だ！ 何もかもねじ曲げやがって！ メガネを外した女も宣誓せんせいしたんだ！ あの不良は死ぬべきなんだよ……いいか、ガキなんか信用するな！」

2は力なくうな垂れる。

一同、憐れむように彼を見つめる。

3、2に近づこうとする。

2、3を手を挙げて制する。

2、虚脱したような声で、

「無罪……奴(あの子)は無罪だよ。決まりだ……」

深いF・O

完

2020.8.19.wed